

寄書

彼岸櫻

長谷川利行

春雨が降り出す、水がぬるむ、朧月夜となる、長閑な若草の堤、そぞろに春の天地は開かれて而して、彼岸櫻は咲き初めた三月だー文章家詩人、つづいて畫家、殊に水彩畫家は、如何な春の夢にあこがれて居ぬだらう、慕ふて戀ひて春を讚美する情は、彼が手腕を振ふて寫生するよりも澤山血潮の燃えることだらう。

人は美しい、春雨に傘して通る人と云ひ、長閑なる岡にイモ人と云ひ、朧月夜の人と云ひ、明快なる春の自然の人を、水彩畫家は、確に他よりも多く煩悶して居るに相違無い、人が美しいのは、自然が麗しいので、人が美しければ自然も一層美觀を呈する。

彼岸櫻が咲いて何となしに春だと云ふ心持になる、ぬるい風が靡くと春風だなーと思ふ、煙突の煙がただ靜かに登つて行くそれを長閑だと眺める位春の氣に成つた、春の氣に成つた私はもう酔つて居るかも知れぬ。

斯やつて春が來て呉たからには、充分春の自然に親むで春を讚美したい。繪具の不足も整はせて、ワットマン紙も購入し、水張もして、何時でも飛び出して寫生の出來る様に用意する、やれ幽寂な霞だ、花曇の庭だ、葦の岡だ、柳だ、櫻だ、夜櫻だ、桃だ、菜の花だ、山吹だと、昨日は東今日は西に辿つて、繪筆

と春と、春の自然と繪筆と戰はしたい。

彼岸櫻が咲いて三月だと切に感した私は、春の人と化して、一日一日暮れて行くと、全盛の春が楽しい、けれどけれど、指折する今頃が、また過去に成つてから戀しいかも知れぬ。

上手

宇都宮 長澤 北斗

専門の畫家書家といはるゝ程の人は別として、素人で上手といはるゝ人は、自ら進んで發動的に上手になつたといふよりは、寧ろ、周圍の人に持ち上げられて受動的に上手になることが多い様に思ふ。

ふとかいて見ず畫が一寸うまく出来る。最初はさほどの自信もないが、見る人にうまいとはめられる。「はて我輩はこれでも上手なのかな」、一寸首をまげる。奮發してやつて見ると、少しは上手になる、興味も出て來る。随つてほめる人もだんぐふえて來る。「我輩はどうしても畫に於て秀でて居ると見える」、自信いやうぬぼれが出て來る。圖にのつて少しよい筆やよい紙をおごつて、やつて見ると、たまには自分ながら感心する様なのも出來る。こんどは知らぬ人までも、「あの人は畫の上手な人だ」などと評判をする。それが自分の耳へもちりりと入る、いやな氣持はしない。益々自分の力をみとめて、大奮發をする。益々持ち上げられる。遂には自ら畫家を以つて任じ、また、人もゆるす様になる。かくて實際の上手となりすましてしまふものであ

る。名譽心といふものは實に恐ろしい力を以つてゐるものである。

研究所日記

榎 の 人

二月八日月曜日 快晴

雨村君蠻聲をほり上げて「ソレ達人は大観す」と得意の琵琶歌をうなり出す、爲に屋内震動せんばかりなり。

二月九日火曜日 曇

望月川上の兩君スケツチ箱をヒツかつぎ三脚をカタ手に又カタ手に四つ切の畫板をもち室内用の大なる畫架を肩にかけ、辨當を腰にブラさげ寫生に出發せしは振つていたり。

二月十日水曜日 晴

望月君、例によつて室内用の畫架を持ち寫生に行かんとす、時に傍にありたる鈴木君曰く「ヨシ給へ君！ソナナ大きな畫架を持て行かなくつてもいゝじやないか、若し忘れてきたなら赤城サンにでもかりてやら、然しぶりたきや持て行き給へ」と、さすがは鈴木君なり。ナンゾその言の皮肉なる。

二月十一日木曜日 曇

紀元節なれば研究所休みなり。何れの石膏も皆ニコヤカならん蓋紀元節並に憲法發布二十年紀念を祝して。

二月十二日金曜日 曇後晴

河合先生アマリ早く見えれば皆大に狼狽す、洋行歸りの岡精一氏參觀に來らる。

二月十三日土曜日 晴

清水君曰く「昨日は地震が、いつたれ」と、又語をついで曰く「地震がユクト電氣の玉の中にある針金が一番よく動く」と、時に稀代のシヤレ男たる鈴木錠吉君曰く「僕の家は電氣は地震がいつても動かない」と皆あやしんで其の故を問ふ君答へて曰く「僕の家は電氣はオヤジだもの」と、思はず皆をして腹をかゝへしめたり。

十四日日曜

今日は別科の日なり。本科と異てあたかも火の消えたるが如く静かなり。時々何處よりか筑前琵琶を習ふ聲聞ゆ。

紹介

◎彗星 四六倍判六十四頁の頗る威勢よき月刊雜誌にして政治文學其他あらゆる方面に向ひて縦横論談を擅にせり初號のことして多少雜駁の感あれど案を拍つの文字も少なからず諷刺的漫畫もまた出色のものあり(毎月二十日發行一冊十二錢、東京府下田端彗星社)

◎水彩鳥 長谷川利行氏主として編輯せらるゝ菊判十六面の小冊子にして和歌俳句及美文を滿載せり、(一冊發行費六錢、和歌山縣有田郡廣村狛方水彩鳥會)